

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K17457

研究課題名（和文）タイプDパーソナリティの急性冠症候群患者の抑うつとコーピングに関する研究

研究課題名（英文）A Study on Depression in Patients with Coronary Artery Disease: Characteristics of Coping Strategies in those with Type D Personality.

研究代表者

山口 大輔（Yamaguchi, Daisuke）

信州大学・学術研究院保健学系・助教

研究者番号：60735182

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではタイプDパーソナリティパーソナリティの冠動脈疾患の抑うつに対するコーピング内容を明らかにし、タイプDパーソナリティの抑うつを改善する個別的なコーピングの指導を見出すことを目的とした。その結果、入院中は抑うつとコーピング方略の「放棄・諦め」とタイプDパーソナリティが正の関係があった。また、退院1ヶ月後は、抑うつとコーピング方略の「計画立案」が負の関係があり、タイプDパーソナリティと正の関係があった。そのため、入院中のコーピング方略である「放棄・諦め」を「計画立案」に変更することが、抑うつを低減する可能性があることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

冠動脈疾患患者への入院中に行う抑うつ予防の退院支援として、「計画立案」が重要であることが示唆された。医療施設で計画的に物事に取り組む方法を指導し、ストレスの少ない退院生活を起こることができるように介入することで、抑うつを低減できる可能性がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the type D personality's coping with depression due to coronary artery disease, and to find individualized coping guidance to improve depression in type D personalities. The results showed that during hospitalization, there was a positive relationship between depression, the coping strategy of "abandonment/resignation," and Type D personality. Furthermore, one month after discharge, depression was negatively associated with the coping strategy "planning," and positively associated with Type D personality. Therefore, it was suggested that changing the coping strategy "abandonment" to "planning" during hospitalization may reduce depression.

研究分野：メンタルヘルス

キーワード：抑うつ タイプDパーソナリティ 冠動脈疾患

1. 研究開始当初の背景

心理的特徴と虚血性心疾患 (CAD) との研究は、1970 年代にタイプ A 行動特性 (タイプ A) が CAD を引き起こしやすいことを指摘した (Friedman, Byers, Diamant, Rosenman, 1975)。特にタイプ A のもつ怒り、敵意などの敵意性が CAD 発症の危険因子であることが示唆されている (Miller, Smith, 1996)。そのため、1990 年代以降は、CAD と敵意性との関連が重要視されるようになった。

このような中で、近年、タイプ D (distress) パーソナリティが注目されている。タイプ D は、ネガティブ感情と社会的抑制の 2 つの要因から構成される。ネガティブ感情とは、不安などのため、自己に対して消極的な考えを持つ傾向であり、社会的抑制とは、他者からの批判を避けるため、社会的な場面で感情表現を抑制する傾向である (Denollet, Sys, Brutsaert, 1995)。タイプ D の急性冠症候群患者 (ACS) は、その約 76% が不安やうつ状態であることが明らかとなっている (Pasquale, Mariarita, Gregorio, Daniela, Ciro, Cristina, 2012)。また、タイプ D の患者はそうでない患者と比べ有意に死亡率が高いことも報告されている (Denollet, 1996)。

以上のことから、近年では、タイプ A の敵意性に加えて、タイプ D と CAD の関連性が注目されるようになった。

PCI など治療法の進歩により、虚血性心疾患 (CAD) に対する救命率は上昇しているものの、特に急性冠症候群患者の突然死の危険性や社会生活の変更による、ストレスや抑うつが急性期を脱した患者の精神的健康の保持と、予後を改善することが新たな問題となっている (循環器病の診断と治療に関するガイドライン 2011 年度合同研究班編, 2015)。そのような状況下で、急性心筋梗塞患者のうつ病の有病率は約 45% と報告されており (Grippe, Johnson, 2009)、一般住民における有病率 (男性 2 ~ 3%, 女性 5 ~ 9%) と比べて、著しく高値である。また、抑うつ症状を有する虚血性心疾患患者の 2 年後の死亡率が 2 倍以上であることが明らかとなっている (Bath J, Schumacher M, Herrmann-Lingen C, 2004)。

以上のことから、タイプ D パーソナリティの急性冠症候群患者が、抑うつにならないように精神状態の安定をはかることは、精神的健康の維持・向上のためにも、冠動脈疾患の死亡率減少のためにも重要な課題である。しかし、日本においてはタイプ D の急性冠症候群患者の抑うつへの対処法に関する研究は、ほとんど行われていない。したがって、タイプ D の急性冠症候群患者への対応策を研究し、実施することが急務であると考えられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、タイプ D の急性冠症候群患者が自分自身の抑うつに対して、どのようなコーピングをしているかを明らかにし、個別的な退院指導や看護介入の方法を探ること、明らかにした具体的なコーピング内容から、急性冠症候群患者に対するパンフレットを作成し、そのパンフレットを示して、内容を実施し、その効果を明らかにすることである。

急性冠症候群患者の抑うつに対処するための看護介入の一方法としては、コーピングが有効である。Lazarus, Folkman (1984) によると、コーピングとは、ストレスを低減するための、認知的、行動的な努力であり、そのプロセスの中で絶えず変化するものであると述べている。患者のコーピング行動がストレスの増減に関連していることが明らかとなっており (Ora, Joyce, Michelle, Claudia, 2007)、効果的なコーピングを行っていない患者ほど抑うつ症状がみられることが明らかになっている (Pilar, Henar, Almudena, 2011)。しかし、急性冠症候群患者を対象に、性格傾向を考慮し、どのような具体的コーピングが抑うつに影響を与えているのかを明らかにした介入研究は見当たらない。

そのため、本研究により、タイプ D の急性冠症候群患者が実際に行っている具体的なコーピングを明らかにし、患者自身で実施できるように教育的な介入をすることで、抑うつを軽減し、精神的健康を改善・向上することが可能であると考えた。

3. 研究の方法

調査方法

虚血性心疾患患者に対し自記式質問紙調査研究により、下記のアンケート調査を実施した。入院中、退院後 1 ヶ月、退院後 9 ヶ月の時期にアンケートを郵送法により配付、回収した。

1) 属性

年齢、性別、就労の有無、配偶者の有無、同居者の有無、喫煙の有無、心疾患危険因子の有無 (高脂血症、高血圧、糖尿病、喫煙、BMI) など。

2) タイプ D パーソナリティ

Denollet (2005) が開発し、石原、内堀、今井、牧田 (2015) により作成された日本語版タイプ D パーソナリティ尺度を使用した。この尺度は、信頼性・妥当性が検証されており、「ネガティブ感情 (= .799)」、「社会的抑制 (= .826)」の 2 因子、14 項目で構成されている。各項目に対し

て、「0点：あてはまらない」、「1点：あまりあてはまらない」、「2点：どちらともいえない」、「3点：ややあてはまる」、「4点：あてはまる」の5件法で回答する尺度である。「ネガティブ感情」と「社会的抑制」の各因子の合計が各々10点以上の場合を、タイプD性格傾向であると判定する。本研究でのCronbach's 係数は、ネガティブ感情 =.829、社会的抑制 =.829であった。

3) コーピング方略

神村ら(1995)が開発した、Tri-axial Coping Scale 24 (TAC-24)を用いた。この尺度は、精神的につらい状況に遭遇したとき、その状況を乗り越えるために、普段からどのように考え、行動するかを測定するために開発されたものである。7下位尺度、24項目の質問で構成されており、信頼性(= .74 ~ .84)・妥当性が検証されている。7下位尺度は「カタルシス」「放棄・諦め」「情報収集」「気晴らし」「回避的思考」「肯定的解釈」「計画立案」「責任転換」である。各項目に対して、「1: そのようにしたことはこれまでにない」、「2: ごくまれにそのようにしたことがある」、「3: 何度かこのようにしたことがある」、「4: しばしばそのようにしたことがある」、「5: いつもそうしてきた」、の5件法で回答する尺度である。得点が高いほど、そのコーピングを行っていることを示す。本研究でのCronbach's 係数は、 =.813であった。

4) 抑うつ傾向

Zung (1965)が開発し、福田和彦、小林重雄(2011)により日本語版が作成されたSelf-rating Depression Scale: SDSを使用した。この尺度は、信頼性・妥当性が検証されており、20項目から構成されている。各項目に対して、「1: ないかたまに」、「2: ときどき」、「3: かなりのあいだ」、「4: ほとんどいつも」、の4件法で回答する尺度である。20項目の合計点が40点以上で抑うつ状態であると判定する。本研究でのCronbach's 係数は、 =.715であった。

分析方法

対象者のSociodemographic characteristicやType D personality尺度、Coping strategyの7下位尺度と、抑うつとの関連を単変量解析で分析を行った。抑うつスコア分布の正規性をShapiro-Wilk 検定を用いて確認したところ正規性が認められなかった。そのため、単回帰解析はSpearman's rank correlationおよび、単変量ロジスティック回帰分析を用いた。

次に、抑うつの有無を従属変数、単変量解析で $P < .10$ の関連の見られた変数を独立変数とした二項ロジスティック回帰分析を行った。多重共線性については投入する独立変数間の相関係数が0.9を超えないことを確認した上で変数として投入した。

Type D personalityの患者のcoping strategiesの特徴を明らかにするために、Type D personality患者と、Non-Type D personality患者とのCoping strategy 下位尺度得点の比較をMann-Whitney U testで分析をおこなった。

優位水準は5%とし、統計処理にはIBM SPSS for windows v. 24を使用した。

倫理的配慮

本研究への参加は任意であり、参加の有無によって、不利益が生じることがないことを、口頭と文書にて説明した。本研究への同意が得られた患者に、調査用紙を配布し回答を依頼した。回収した調査用紙は鍵がかかる場所に保存した。調査用紙は個人が特定されないように無記名記入とした。また、本研究は本学医倫理委員会の承認を得て行った。

4. 研究成果

入院中の患者は、ロジスティック回帰分析の結果、抑うつにはFull-time work (OR: 0.23, C.I.: 0.08 - 0.64) が最も顕著に関連していた。次いで、Type D Personality (OR: 2.78, C.I.: 1.06 - 7.24)、コーピング方略の放棄/諦め (OR: 1.33, C.I.: 1.07 - 1.65) の関連が有意であった。

退院1ヶ月後の患者は、Type D personality (OR = 3.10, 95% CI=1.05-9.17)が独立した抑うつの因子であった。コーピング方略の計画立案 (OR = 0.72, 95% CI=0.55-0.93)が独立した抑うつのリスクを低下させる因子であった。

入院中の年齢、性別、抑うつ傾向の有無で調整した多変量解析の結果、入院9ヶ月目の抑うつに関連する要因は入院中のPlanningのOR 0.80 (95% CI, 0.66-0.97)のみであった。

以上の結果より、入院中の冠動脈疾患患者が行っている「放棄・諦め」のコーピング方略を、「計画立案」のコーピング方略の実施に変更できるような介入が、冠動脈疾患患者の抑うつの予防、軽減に必要であることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Yamaguchi Daisuke, Izawa Atsushi, Matsunaga Yasuko	4. 巻 59
2. 論文標題 The Association of Depression with Type D Personality and Coping Strategies in Patients with Coronary Artery Disease	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Internal Medicine	6. 最初と最後の頁 1589 ~ 1595
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2169/internalmedicine.3803-19	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yamaguchi Daisuke, Izawa Atsushi, Matsunaga Yasuko	4. 巻 68
2. 論文標題 Assessment of Depressive Tendency, Coping Strategies, and Type D Personality in Japanese Patients with Coronary Artery Disease	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 信州医学雑誌	6. 最初と最後の頁 97-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11441/shinshumedj.68.97	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山口大輔
2. 発表標題 冠動脈インターベンション後の抑うつ傾向に関連するコーピング方略とタイプD性格特性の変化
3. 学会等名 第70回日本心臓病学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山口大輔、伊澤淳、松永保子
2. 発表標題 冠動脈疾患患者のタイプDパーソナリティに関する研究 - 抑うつに対するコーピング方略の特性 -
3. 学会等名 第83回日本循環器学会学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------